

4. 災害遺産から学ぶことの大切さ

過去の災害の記録をどう今後の防災に生かすかは大変重要なことです。つまり、経験から何を学ぶのか、どう対応すべきなのか、教示されるものは何かということになります。地殻変動帯にある日本列島では、地震、火山噴火、土砂災害はごく当たり前のもので宿命ともいえるものです。この災害に関しては文字の記録としては過去千数百年のものしかありませんが、1万年前の遺跡調査や地形調査ということで過去の自然現象の歴史が多く発見されてきています。このような記録は、その地域に何が起きていたのかということでその再現性が示唆されるものだし、大きな災害があるたびに防災技術や技能を向上させてきました。同時に、災害はその時の社会の在り方を大きく変えてきたということも大事なことです。そして、最も大事なことは事前に知ることによって備えをし、避難することを改めて大事なことだと認識します。

しかし、天が落ちて気はしないかと心配したという故事の杞憂ではありませんが、あれこれ無用な心配をすることで、普段から自然災害を心配して何事も手につかないというのでは困ります。大きな災害があると、よく風化するということが言われて、正しく伝承され情報を共有されて次へ生かすということは日が経つにつれて難しいとされます。そこで、昔の人は文書やモニュメントあるいは神社を建立して伝えることに腐心したのだと思います。

これまでに経験したあるいは起きたと思われるものは、単なるイベントとして認識するだけというよりも、これまでどのような対応をしてきたのか、すべきなのかを学習する必要があります。自然災害は、何と言っても命にかかわる大きな出来事です。自然災害のメカニズムの大まかなことは相当に分かってきていますが、最近、被害は小さくなるどころか規模も頻度も大きくなる傾向があります。日本列島は地形や地質から、自然現象とそれによる変化、変質、変動は避けられません。

そして、居住区域も安全なところが確実に確保されるような状況ではありませんので、相当に懸命な対応をしていかないとはいけません。そういうことから、どのような場所で過去にどのような災害が発生したのか、被害があったのか、それに対してどのような対応をしてきたのかを、歴史から学んで情報を共有する必要があります。

災害だけではなく、歴史から学ぶということは、そこから今の環境を考慮して課題解決や新たな構想をすることでもあると思います。防災も減災も備えることではありますが、それにはこれまでの経験を活かしつつ自然と共生していくこと、危険因子を理解しておくことが必要です。過去のことを忘れて、自分は大丈夫という思いは避けるべきことだと思います。